ちほの
おしゃべりタイム

美濃和紙のあかり

オフィスPrima 代表
フリーアナウンサー
ビジネスマナー講師
透（とおる） 千保（ちほ）

東海地方の各放送局（岐阜放送/ぎふチャン、FM GIFU、東海ラジオ、メ～テレなど）で数多くの番組やニュースを担当。司会、ナレーションの他、名鉄電車、名古屋市営地下鉄など、公共交通機関のアナウンス放送に携わる。
一方、企業・大学において、ビジネスマナー、電話応対などの研修講師を務め、人財育成に取り組んでいる。

日の暮れるのが早くなり、あかりが恋しい季節。美濃市で行われていた「第29回美濃和紙あかりアート展」を見た時のこと。夕闇が迫ると、うだつの上がる町並みの軒先に並んだオブジェに灯がともり、どこからともなく人が集まってきます。あかりが入ると和紙を通して柔らかな光がこぼれ、町並みと一体化した幻想的な風景が広がりました。

ここに店を構える提灯作家、加納英香さんの作品『ホシノヨミガエリ』は今年の美濃和紙あかりアート大賞に選ばれており、和紙に捻りを加えた小さな球体がいくつも集まって大きな球体を成し、星のようにもアジサイの花のようにも見えました。

美濃和紙は、約1300年以上前、奈良時代に戸籍用紙として使われたと言われています。その品質の高さから、障子や襖、照明器具やインテリアなど様々な用途に使われて来ました。また、東京2020オリンピック・パラリンピックの表彰状には「美濃手すき和紙」が採用されたことは記憶に新しいところです。2014年には、「美濃手すき和紙」の源流とも言える「本美濃紙」の手漉（てす）き和紙技術がユネスコ無形遺産に登録され、古文書や絵画など国宝級の文化財の修復には本美濃紙が使われています。加納さんのお店で、照明器具を見せていただくと、同じ手漉き和紙でも、本美濃紙はまったく混じりけのない白さが際立ち、光がより鮮明に届くのです。光を透かして見ることが前提と聞き、その技術の高さに驚きました。

本美濃紙の指定要件は大変厳格で、楮（こうぞ）のみを原料とすること、伝統的な製紙用具を使い伝統的な製法を用いて制作すること、伝統的な本美濃紙の色艶や質感などの特質を保持すること、だそうです。さらに、本美濃紙を漉くことができるのは、重要無形文化財の技術を保持し、本美濃紙保存会に所属する選ばれた職人なのです。現在のところ会員は８名。そのため、原料や用具の確保だけでなく、後継者育成のための研修にも力を入れています。

先月、全国の重要無形文化財保持団体が一同に会する大会が行われ、各地の秀作を鑑賞できる「日本の伝統美と技の世界」が、みんなの森ぎふメディアコスモスで開催されました。その際、本美濃紙の紙すきの実演もあり、県外の参加者から大きな関心が寄せられました。縦揺りに横揺りを加えた複雑な手法で紙が漉かれ、繊維を絡ませながらリズミカルにどんどん漉き上げられていく和紙。こうした職人の技があるからこそ、薄く柔らかな風合いであるにも関わらず、布のように強靱で耐久性にも優れた和紙が出来上がるのですね。

ほんのりと照らす美濃和紙のあかりは、冬の夜を明るく彩ってくれるだけでなく私たちの心に安らぎをもたらしてくれます。来年は、このあかりのように、人々の心を照らし出す希望に満ちた年であってほしいと思いました。